



「そんな日もある」なんて言う

翔流

「え？急停車？」

最愛の人から伝えられた、一本の電話。

「ごめんね。床下からの物音だって……」

「大丈夫なの？」

「最初は点検してたらしいけど、そのあと結局車庫に入って、今次の電車を待ってるよ」

「そっか……。とりあえず無事でよかった」

「ごめんね。ご飯冷めちゃうよね……」

「気にしないで。先に柚子香を寝かしておくわ」

「ありがとう。もう少し待ってて」

何かに遭ったというわけではないと分かり、桃花はホッと胸を撫で下ろした。

「まあ、そんな日もあるよね……」

電話が切れると、桃花は腰を上げ、夫の直輝の分の食事にラップを張った。

「パパまだこないの？」

桃花のもとに絵本を持って歩いてきたのは、二人の娘である柚子香。今年で四歳になる柚子香は、桃花のことも大好きだが、何より帰って来た直輝がしてくれる肩車が毎日

の楽しみだった。しかし、中々帰ってこないことに、不安げな顔を浮かべている。

「大丈夫よ。少し遅くなるだけだからね」

「ほんと？」

「本当よ。ほら、歯磨きした？絵本読んであげるから。そうしてる間に、きつと来るよ」

「でも、そしたらあさになっちゃう……」

「ならないよ。平気」

我が子のまだ幼さ故の不安に、桃花は宥めようとしつつもその顔にうっとりしてしまふ。桃花は柚子香のことを、とても溺愛していた。そして二人で育てると誓った直輝のこと、より一層愛していた。

その頃、急停車した帰りの電車に足止めを食らっていた直輝は、暇つぶしのスマホにも徐々に飽きが見えていた。暗くなってしまうホームには、遅延によって同じように足止めされている乗客たちの群れがひしめき合っていた。

「なんてこったい……」

直輝は隣にあった自動販売機に五百円を突っ込み、無糖のコーヒー缶を買うと溜め息

混じりに栓を開けた。

「ま、そんな日もある、のかな……？」

流し込んでいく刺激のある苦味は喉を伝って落ちていき、胃奥に直接重みのある苦さを与えていく。その刺激感が、直輝をブラックコーヒー好きにした理由でもあった。

「次は……三十分後か……」

運行表を見た直輝は、またさらに溜め息を吐く。少しづつ進んでいく時間に焦りが芽生え、方向が違う電車に宛先のない苛立ちが生えてきていた。

そんなこともあり、少し気分が曲がって歪み始めてきた時だった。

「おや？あなたは沖田先輩っすかな？」

あまり聞かない声に振り返ると、そこには不器用にツンツンさせた蓬髪を頭に乘せた若いスーツ姿の青年がいた。片手にビール缶を持ち、白いイヤホンを首にかけている。

「お前は、もしかして北上か？」

「そうっす！北上裕太っす！憶えててくれたんすね！嬉しいっす！」

憶えててもらえたことが嬉しかったのか、ぐいっとビール缶に口をつけたのは、高校の頃の後輩である北上裕太だった。

「お前、なんでここに？」

「聞いてくださいよ。仕事早く終わったんで、この近くにある友達の家に行こうと思っただけですよ。したら見ての通りこの始末なので、どうしよっかなって思ってたら先輩が見えたんで、久しぶりに声かけよってなった次第です！」

缶ビールをべこべこさせながら、北上は息を吐いてそう言った。彼は高校卒業後、夢見ていたライブ会場の音響の仕事をしようと考えていたそうだが、そこで現実の難しさを思い知って挫折し、大人しく一般企業に就職したところ、意外にもそこで上司や幹部に気に入られ、順調な生活を送れるようになり、今では昔の夢など忘れて、やりたいことを一口ずつ楽しんでいるとのことだった。

「…ていうか、今は「沖田」じゃねえよ」

「え？改名したんすか？」

「いや。婿入りしたんだ」

「マジっすか！？え、何になったんすか？」

「今は古谷直輝だよ」

婿入りしていた話はしていない。それもあって北上は、面白いくらいに驚いていた。

「マジっすか？」

「なんだよ？婿入りして変か？」

「いいや全然！先輩が幸せなら、僕はそれ以上に求めませんよ」

けらけらとしながら、北上は垂直にビール缶を立てて飲み干し、空になった缶をゴミ箱に捨てた。

そうして待っていた時、帰りと逆方向の電車が侵入すると同時にホームからアナウンスが鳴り響いた。どうやら、この電車は回送電車になったということ、そして次の電車はもうしばらくかかるとのことだった。

「ちえっ！なんで乗れねんだよ！ふざけやがってこのお！」

そこそ酔っているからか、北上はスピーカーカーに向かって声を荒げた。

「おい、やめろって……」

直輝は焦って北上を制止した。北上は落ち着いてはいくものの、むすつとしていている。

「帰れないのはお前だけじゃないから……」

「そうっすけど！電車のアナウンスとホームのアナウンスが被って何言ってるか分からないっす！しっかりしてほしいっす！」

「それはそう」

直輝と北上は、乗客たちの群れを眺めたり、SNSを覗いたりしながら時間を潰して

いた。

「婿入りしたんすねえ。何で婿入りなんすか？酒のアテに聞かせてくださいよ」

スマホを見ながら北上が、ふと直輝にこう言った。

「今さっき捨てちゃっただろ？」

「酔ってるうちは飲んでんのと同じっすよ」

よくわからない理屈だが、隠すことでもないと思った直輝は、自分が婿入りしたことについて語り始めた。

大学時代に出会い、桃花が二十四歳の誕生日を迎えた日、二人は婚約を約束した。

二人はそれぞれの両親にこのことを報告した。期待に胸が膨らんだが、同時に上手くいくかどうかという不安も隣に立っていた。

古谷家の方からは快い返事が帰ってきた。両親が直輝の心の暖かい人格者であることを知っていたからこそ、この答えが出来たのだろう。

「直輝君はいい子だから、桃花をよろしくね」

「はい。不器用ではありますが、幸せにします」

この返事を貰えた時の二人は、このままスムーズに事が進む。そう思っていた。

しかし、沖田家はそうはいかなかった。

「何？俺はだめだ」

「なんで？何がいけないの？」

「そんな化粧に包んだ女はだめだ。女とは慎ましく、何事にも動じない謙虚さがなくてはだめなんだ。お前はそれに合わない」

直輝の父から心無い言葉を飛ばされ、目に光がなくなる桃花。胸の奥から吸い取られるように、自己を肯定する気力が抜けていくのがわかった。

「待てよ。その言い方はないだろ」

「考え直せ、直輝。こんなやつを俺は沖田家の嫁として認めねえ」

ひどく肩を落とす桃花と、怒りに奥歯を噛み締める直輝。この三人の間には、紺色の失意が沈澱し、辛子色の怒りが燃え、そして埃を被つてくぬぎ色をした頑固な意志が立ちほだかり、火花を散らしていた。

直輝の父がここまで頑ななのは、彼の根元にあった古臭い亭主関白思想と、人を見た目で決めてしまう先入観、そして「○○は○○であるべき」といった固定概念によるものだった。実際直輝の母は、ずっと直輝の父の全てに尽くすような生き方をしていた。言いたいことも、まるで言えていなかった。

「父さん、もうその考えは古い。それから、今すぐに桃花に謝れ」

「なんだと？誰に向かって口利いてんだ」

両者の間に爆ぜる火花は温度を増す。見ていられなくなった桃花は、二人を止めに入る。

「直輝君、もういいよ…」

「よくない。僕が許せない」

「それ以上何か言ってみろ？金輪際お前たちの結婚は認めないからな」

直輝は身体中に巡っていく怒りに飲み込まれることに耐えながら、父をギョッと睨みつけた。その顔は、あと一步で噛み付くヤマカガシを彷彿とさせた。

「もういいや。僕は帰る。行こう」

「え？あ、うん…。お邪魔しました…」

「二度とそんな顔見せるんじゃないねえ」

結局、沖田家からはまともな返事は、貰うことは出来なかった。

「あの親父。失礼なこと言いやがって…」

車を走らせる道中、直輝は父に対する罵詈雑言を湧く限り吐き散らしていた。それを見ている桃花は、ただ悲しく、そして直輝が可哀想だと感じていた。

「…ごめんね桃花。荒っぽい言葉聞かせて」

「だ、大丈夫だよ。そんな日もあるよね…」

「とりあえず、今夜の食材買って帰ろう」

「そうだね。今夜は何作るの？」

「…今日は、桃花の食べたいものでいいよ」

「じゃあ…。アヒージョ食べたい」

「おお。中々面白いね。いいよ。作ろっか」

「わーい！」

噛み締めた奥歯がずきずき痛み、今でもあの苛つく顔が脳裏に残る。それでも、後ろで鈴を転がすように笑う桃花の顔があるだけで、さっきまでの怒りは、通り雨みたいなものだったと感ぜられた。

夕食になり、二人は小さなテーブルで献立であるアヒージョを楽しんでいた。桃花の好物である海老に加え、アスパラガスやアサリなどを入れたオリジナルの組み合わせだった。

「どう？美味しい？」

「美味しいよ。直輝君って、日に日に料理のレパートリー増えてるよね？」

「え、そうかな？元々得意っていうのはあるんだけどさ」

「アヒージョって言って、「難しいな〜」って言われるかと思ったのに、普通に頷いたから、なんだか技が通じなかった時みたいだったよ〜」

「なんだよその例え？」

「今日やったゲームの気持ちと重ねたんだよ」

「なんだそれ」

桃花の健気な会話に、直輝の口角は自然と緩んでいく。テーブルの上に並ぶ料理たちが、より一層輝きが添えられているようにも見えた。

「ありがとう。桃花」

直輝は桃花の方を見ながら、ほそっと呟いていた。

「もう。またそんな顔してる。だめだよ。直輝君が悪いわけじゃないんだから」

「そうは言っても、気分がね…」

慰めようとする桃花だが、直輝の気分は簡単に晴れるものではなかった。自分の好きな人を貶された怒りと、何も反撃できなかった自分への悲しみが、まだ余韻を残していたからだ。

「…そうだ、直輝君」

「何？」

「アヒージョってさ、どんな料理か知ってる？」

俯きながら食べている直輝に、桃花はふとこんなことを言い出した。

「え？何料理って、国の話？」

「いや。どんな調理法でしようか？ってこと」

「なんだろう……。え？揚げ料理、じゃない？」

「残念。それはハズレ〜」

迷いつつも答えた直輝に、桃花は不正解だと言いながら海老とアスパラガスを口に運んだ。

「え？違うの？」

「実はね、これ煮る料理らしいよ」

「そうなんだ。知らなかったな」

「でしょ？私もつい最近知ったんだ」

「：それが、どうしたの？」「伝わりにくかったかもしれないけど、見かけによらないんだよ、ってこと」「え？」

何を言われたのか、直輝には分からなかった。一体何を言おうとしているのか。

首を傾げたところに、桃花は続けた。

「アヒージョが実は煮る料理だったみたいなのに、この人はこんなんだけど、実はこんな人でした。みたいなこともあるよねって話」

「それは、つまり？」

「私たちは直輝君のお父さんみたいなのに、人を見かけで決める人にはならないようにしようね」

そう言って、桃花は清々しく笑っていた。桃花も心の奥に、直輝と同じ気持ちを隠していた。その気持ちを、料理に落とし込んで飲み込んでしまおうとしたのかもしれない。そう思うと、なんだか直輝には、可笑しかった。

「ぶふふふ…」

吹き出した直輝に、桃花は驚きながらも、笑ってくれた事が嬉しかった。

「…そうだ、桃花」

「ん？なあに？」

声をかけられた桃花が反応すると、直輝はそっと箸を置き、その場の空気を改めた。

「ど、どうしたの…？」

「僕たち、結婚するでしょ？」

「うん。そうだね」

「僕、婿に入りたいな」

それは桃花にとって突然なセリフだった。

「え？む、婿に入るの！？」

「うん。桃花がいい」

「え、でもでも、大丈夫なの？またお父さんとギクシヤクしないかな…？」

「大丈夫だよ。「そんな顔見せるな」って言ってたし、それに、そっちもお兄さんとかいないんでしょ？」

「それはそうだけど…」

嫁に入ると思っていた桃花は、知らないシチュエーションにどうすればいいか分からなかった。ずっと「沖田桃花」となる自分を予定していたこともあり、少し緊張も感じていた。

「それに、今の時代は、両家の承諾は要らないみたいだよ。どうかな？」

「わ、私は全然いいけど、親はどうかな…？」

「それを、また近いうちに訊きにいこう」

全く予期せぬことだった。しかし、桃花は悪い気にはなっていないかった。直輝の合

せるその瞳が、真っ直ぐで綺麗に、前を向いていたから。

そして数日後、二人は古谷家に婿入りとすることを伝えるに行った。直輝は自分達に置かれてる現状と、直輝自身の中で息をする強い想いを伝えた。

「構わないよ」

桃花の父から告げられた言葉は、快い返事とゆっくり深い頷きだった。

直輝は何度もその頭を床につけ、「もういいよ」と言われるまで喜びと感謝を表現した。

「んで、それから正式に古谷家に入り、旅行に行ったり柚子香が産まれたり。色々あったけど、これで良かったなって思ってるよ」

こうして直輝の婿入りの話は幕を下ろした。

「なっ！泣けるストーリーじゃないじゃないですか！先輩ッ！！」

隣では北上が目頭を押さえながら、本気で涙を堪えながらも堪えきれていなかった。

「そ、そんな泣く話か？」

「泣く話っすよ！自分がのほほんと生きてる間に、先輩は苦勞して苦勞して、幸せを掴んでいるんだと考えたら……。自分が情けなくて……」

「何言ってるんだよ。お前はこれから、だろ？」

「…ぐすん。そうっすね。精進します」

そうこうしていると、ようやくホームのアナウンスが運行を再開すると伝えた。

やがて電車がやって来て直輝と北上は乗り込んだのち、「今度会おうね」と手を振った。

「ただいま」

長く感じられた残りの家路を渡り抜き、直輝は家へと辿り着いた。玄関は、ありがたいことに鍵が開いていた。

「ごめんね桃花。遅延食らって…。遅くなっちゃった…」

「そんな日もあるよ。気にしないで。お風呂とご飯、どっちにする？」

「じゃあ、先にご飯貰うよ」

「はい。じゃ、手洗ってきてね」

手を洗ってスーツから着替えて戻ると、ちょうど料理が温め直されていた。献立は、鰯の煮付けと味噌汁だった。

「行きつけのスーパで、鰯が安かったってのと、柚子香が魚食べたと言ってたか

ら頑張っちゃったの」

「そっか。柚子香はもう寝た？」

「さすがにもう寝かしたわ。明日はお休みだけど、夜更かしはさせられないもの」

「それはさすがにね」

いつもなら帰って来た時、柚子香の嬉しそうな顔を迎えていたが、今日は惜しくも逃してしまった。それが少し、直輝には心残りだった。

「まあ、そんな日もあるよ」

桃花は手を合わせた直輝の隣に座り、林檎酢の入ったコップに口をつけていた。

「美味しいね。桃花も料理上手くなったね」

「えへへん。私もママになったからね。いつまでもナオくんに頼ってばかりじゃね」と、いつもの桃花が見せる笑顔で言った。

「ね、食venaがらでいいけど、明日はどこか行きたい？」

「まあ、桃花が行きたいならいいけど」

「それならさ、隣町に出来たシヨッピングモール行かない？柚子香に服とか靴、買ってあげたくて」

「へえ、柚子香もおしゃれする歳かな？」

「そうかもね。そこは私に似たのかな？私も昔からおしゃれするみたいだったし」

「それを言えば、顔とかは僕に似た気がするけどね」

「どうだろうね」

当の本人は寝てしまっているが、自分の子供の話というのはこんな些細な話でも花が開くものなのだ、改めて再確認し、嬉しかった。

「今日はお仕事、どうだった？」

「安定してきたよ。仕事いえば、後輩の北上君も就職していたよ」

「あら。あの子結局、普通の仕事してるのね」

「そっちの方で上手くいったみたいだよ」

「まあそんなこともあるよね」

柚子香の話から、後輩北上の話へ。その日の一片でしかない話だけれど、なんだか、かけがえのないものみたいに感じてくる。こう感じられるのは、桃花がいる前じゃ、知らなかった。

夕食を食べ終えてお風呂も終わり、色んなことを話せた一日もいよいよ終わる頃になった。

片付けを終えて寝室に向かうと、桃花は先に柚子香が寝ている布団に入っていた。二

人の寝顔は、とても心地よさそうだった。

「ただいま。柚子香」

寝ている柚子香の頬を、直輝はそっと撫でた。

「おやすみ、桃花」

もう寝ていると思った直輝は、桃花にそっと挨拶し、電灯を消した。

「おやすみ。あなた」

布団に潜った暗闇の中、桃花が声をかけた。

「明日は柚子香を、楽しませてあげようね」

「そうだね。きつと寂しかったろうから」

「ふふ。そうね」

「それじゃ、また明日」

暗い部屋の中でも、直輝は桃花の微笑む顔をしっかりと確認できた。そしてその安堵を片手に繋いで、眠りの方向へと沈んだ。不器用な日々が、これからもきつと多く続いていくだろう。けれど二人は、それさえも期待していた。柚子香と、桃花と、直輝。三人がこれからも慎ましくも愛し合っていれば、やるせなさも疲れも、「そんな日もある」なんて言って、笑い合える気がしたから。

翔流さんの別作品『月下美人の咲く図書館』を、函南町立図書館ホームページで読むことができます（PDF版）。また、地域資料として貸出用冊子も所蔵しています。

函南町立図書館ホームページ（短編小説作品一覧）↓



「そんな日もある」なんて言う

2024年10月26日 発行

著者 翔流

令和6年度 函南町立図書館8月～11月Y A展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事柄を扱います。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っていません。

電車の遅延に巻き込まれた直輝は、数年ぶりに再会した後輩に自身が婿入りをした経緯について話を求められる。駅のホームで語られる、紆余曲折をしながらも幸せを築いた過去とは。これはとある夫婦の思い出、優しい日常的一幕。

